久富綿打遺跡

福岡県筑後市大字久富所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第41集

2002

筑後市教育委員会

久富綿打遺跡
（ひさどみわたうち）

2002

筑後市教育委員会

序

本報告書は、筑後市教育委員会が安達建設株式会社の委託を受けて平成12年度に実施しました久富綿打遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

久富綿打遺跡は、筑後市のほぼ中央の低位段丘上に位置し、周辺には、奈良～平安時代にかけての住居跡が確認された若菜森坊遺跡、近世の区画溝が確認された若菜鞘ノ本遺跡・若菜大堀遺跡などが点在します。

本報告書が、地域における文化財及び歴史に対する認識と理解を深めるとともに学術研究の一助になれば幸いと存じます。

なお、発掘調査から整理報告に至るまで、多大なご協力を頂きました関係者並びに作業参加者の方々に深く感謝します。

平成14年３月

筑後市教育委員会

教育長　牟田口和良

例　言

1.本書は、宅地分譲工事に伴い、安達建設株式会社の委託を受けて、筑後市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2.発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行い、出土遺物・図面・写真等は筑後市教育委員会において所蔵・保管をしている。なお、発掘調査および整理作業の関係者はⅠ.調査経過と組織に記したとおりである。

3.調査に用いた測量座標は、国土調査法第II座標系を基準としているため、本書に示される方位はすべてG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度はこれを基準としたものである。また、水準はT.P.を基準としている。

4.本書に使用した図面のうち、遺構及び遺物の実測図は小林勇作、高田知恵が作成し、図版の浄書は㈱埋蔵文化財サポートシステムが行った。

5.本書に使用した写真のうち、遺構の写真撮影は小林、高田が行い、遺物の写真撮影は小林が行った。

6.本書に使用した遺構表示は下記の略号による。

SD－溝　　SF－道路状遺構　　SK－土壙　　SP－ピット

7.本書の執筆及び編集は小林が担当した。

目　次

Ⅰ.調査経過と組織……1
II.位置と環境……2
III.調査成果……5
(1) はじめに……5
(2) 検出遺構……5
(3) 出土遺物……10
IV.まとめ……12

Ⅰ.調査経過と組織

安達建設株式会社は、筑後市大字久富字綿打605-6外に宅地分譲の開発を計画し、開発予定地における埋蔵文化財の有無とその取扱いについて筑後市教育委員会に照会を行った。筑後市教育委員会ではこれを受け、現地での確認調査を実施することとした。重機による確認調査は平成11年５月及び７月の２回に分けて実施し、開発予定地の東部分から遺跡が確認された。このため、埋蔵文化財の取扱いについて関係者と協議を行い、永久構築物である道路設置部分と掘削の及ぶ浄化槽設置部分について、筑後市教育委員会が発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査は開発予定面積14,545㎡の内1,573㎡を実施し、調査期間は平成13年１月９日から同年３月５日であった。出土遺物等の整理作業及び報告書作成については、随時文化財整理室にて行い、発掘調査並びに報告書作成に要した費用は、すべて安達建設株式会社が負担した。

調査組織

１）平成12年度体制（発掘調査）

総括	教育長	牟田口和良
	教育部長	下川　雅晴
庶務	社会教育課長	庄村　國義
	文化係長	成清　平和
	文化係	永見　秀徳
		小林　勇作（調査担当）
		上村　英士
		柴田　　剛（嘱託）
		立石　真二（嘱託）

２）平成13年度体制（報告書作成）

総括	教育長	牟田口和良
	教育部長	下川　雅晴
庶務	社会教育課長	松永盛四郎
	文化係長	成清　平和
	文化係	永見　秀徳
		小林　勇作（執筆及び編集担当）
		上村　英士
		柴田　　剛（嘱託）
		立石　真二（嘱託）

３）発掘調査参加者（順不同、敬称略）

調査補助員	高田　知恵
発掘作業員	井上むつ子、江崎　末廣、田島ヤス子、田中ミドリ、馬場　孝司、馬場千鶴子、東　　末子、平井　良治、渡辺　茂喜

４）整理作業参加者（順不同、敬称略）

整理補助員	平塚あけみ、仲文恵
整理作業員	荒巻　悦子、妹川　玲子、佐々木寿代、福田　澄子、野間口靖子、野口　晴香、湯川　琴美、横井　理絵

なお、発掘調査及び報告書作成に際しては、以下の方々にご指導、ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。

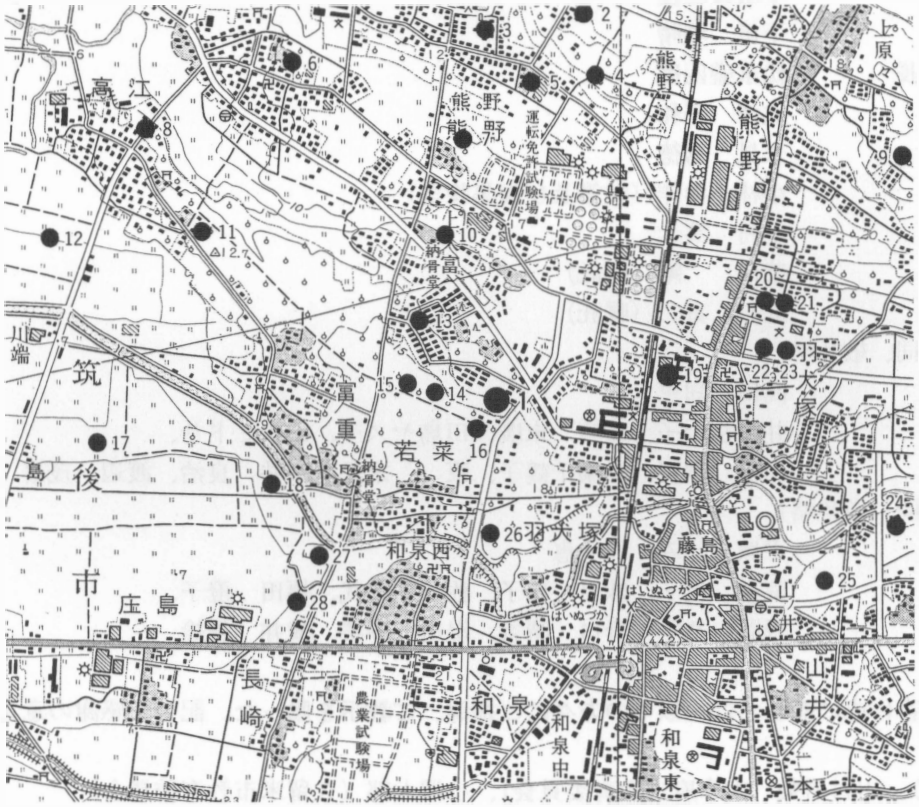
小田和利（福岡県教育庁）、山村信榮（太宰府市教育委員会）、小澤太郎（久留米市教育委員会）

II.位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部にあたる。市域をJR鹿児島本線と国道209号線が縦断し、国道442号線が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は、国道に沿って市の中心部に形成されている。

久富綿打遺跡は、筑後市街地の西側に位置した標高14m位の低位段丘上に立地し、周辺には多くの文化財が点在する。まず、指定文化財に目を向けてみると、当遺跡の北方約1.3kmに位置する坂東寺（784年頃創建）の境内には、『石造五重塔（県指定文化財）』が立造する。「貞永元年（1232）」の陰刻銘があり、筑後地方最古の在銘塔として著名である。また、その坂東寺からやや離れたところの西側には坂東寺の鎮守社である熊野神社があり、その参道の放生池には『石造眼鏡橋（県指定文化財）』が架かる。「元禄十丁丑年七月吉日（1697）」の陰刻銘があり、県下で二番目に古い眼鏡橋である。更に、熊野神社では毎年1月5日に『鬼の修正会・追儺祭（県指定文化財）』が伝統行事として行われている。この他、民俗行事として指定を受けいているのは、大字久富に所在する熊野神社において毎年8月14日に行われている『盆綱曳き（県指定文化財）』がある。施餓鬼行事の一種で、全身に煤を塗り、頭には荒縄の角、腰には締め縄を巻き、地区内を菰と藁で編んだ綱を引きながら駆け回るといった独特なものである。次に当遺跡周辺の遺跡について概観すると、当遺跡の南側において近世の区画溝が確認された若菜鞘ノ本遺跡、若菜大堀遺跡が点在している。更に、南の丘陵からは縄文～近世の複合遺跡である若菜森坊遺跡が確認されており、一帯は埋蔵文化財の宝庫として注目されている地域である。

さて、久富地区は現在も農業の盛んな地区である。この地域は、かつて川が少なく農業用水が不足しており、久富村に在住していた中島安平らによって大規模な水路工事が行われたのである（享保年間：1716～1736）。工事は、山ノ井川に井堰を設け、羽犬塚から久富までの約3kmの用水路を開削するといった大規模なもので、現在も一部で使用され続けている。



1 久富綿打遺跡
2 熊野山ノ前遺跡
3 熊野屋敷遺跡
4 久恵北草場遺跡
5 熊野屋敷遺跡
6 久富鳥居遺跡
7 久富大門口遺跡
8 高江原口遺跡
9 前津中ノ玉遺跡
10 久富斗代遺跡
11 高江遺跡
12 高江キレト遺跡
13 久富市ノ玉遺跡
14 若菜大堀遺跡
15 〃
16 若菜鞘ノ本遺跡
17 若菜立萩遺跡
18 若菜田中前遺跡
19 羽犬塚寺ノ脇遺跡
20 羽犬塚中道遺跡
21 〃
22 羽犬塚射場ノ本遺跡
23 〃
24 徳久中牟田遺跡
25 山ノ井川口遺跡
26 若菜遺跡
27 若菜湖ノ江遺跡
28 長崎坊田遺跡

Fig.1 周辺遺跡分布図（1/25,000）

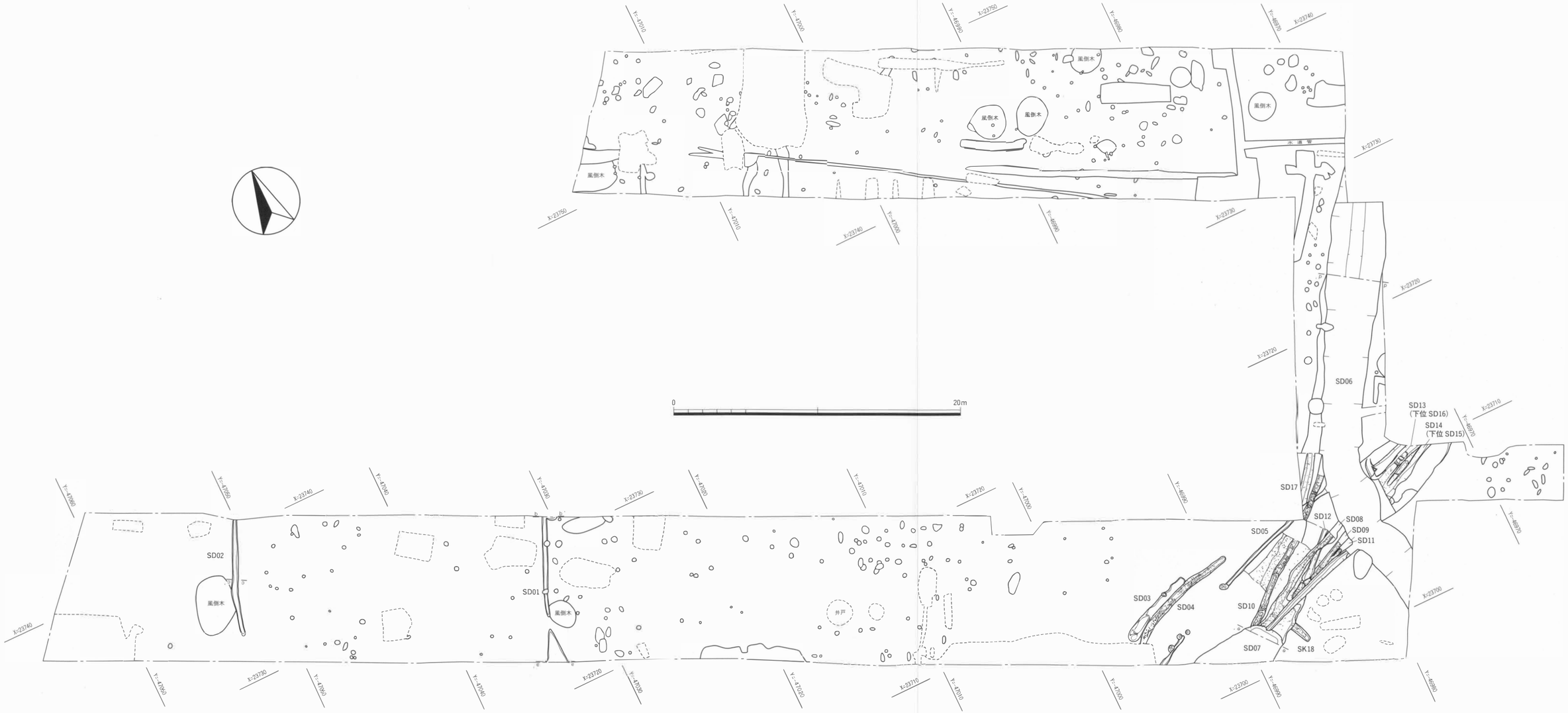


Fig.2　久富綿打遺跡遺構全体実測図（1/200）

Ⅲ.調査成果

(1) はじめに (Fig.3)

当遺跡は、筑後市大字久富字綿打605-6外に所在し、標高14m位の低位段丘上にある。宅地分譲に伴い、永久構築物である道路設置予定箇所と掘削を受ける浄化槽設置予定箇所の範囲内で、遺跡が確認された約1,600m²について発掘調査を実施した。調査期間は平成13年1月9日から同年3月5日までで、この間、重機による表土除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行った。調査は小林勇作が担当し、高田知恵の協力を得た。

調査の結果、調査区からは溝、土壙、ピット等を検出し、以下はその成果について報告する。

(2) 検出遺構

溝

SD01 (Fig.2・4、Pla.3)

南側調査区のほぼ中央で検出した南北溝である。深さ0.07m前後と削平されており、溝の途中は切れている。溝幅は北部で0.5m前後を測るが、南部は南方向にいく程幅が広がり最大1.3mを測る。埋土は黒褐色土を基調とし、遺物は須恵器(坏)、土師器(土鍋)が出土した。

SD02 (Fig.2・4)

南側調査区の西側で検出した南北溝で、溝の南端は終息する。約8m分を確認し、溝幅は0.42前後、深さは0.07m前後を測る。溝の断面は緩やかなU字状を呈し、埋土は暗黒褐色土の単一層であった。出土遺物はない。

SD03 (Fig.2・6、Pla.4)

南側調査区の東側で検出した北東―南西方向の溝で、SD04を切るように確認した。検出長約5.65m分を確認し、深さは0.06～0.30mを測る。溝底の北部はほぼフラットな面であるが、南部は楕円形状に更に深く掘り込まれており、埋土は黒色土、黄褐色土、灰色土の混合土であった。遺物は土師器(片)、白磁(皿)、染付(猪口)、陶器(鉢・擂鉢)が出土している。

SD04 (Fig.2・6、Pla.4)

南側調査区の東側で検出した北東―南西方向の溝で、SD04に切られるように確認した。検出長は約8.50m分を検出したが、溝の南端は撹乱にあい、北端は終息している。上幅0.42～0.57m、下幅0.18～0.46m、深さ0.03～0.11mを測り、溝の断面は緩やかなU字状を呈する。溝底からは1～5cm位の小石や陶器片等が敷き詰められた、いわゆる「バラス敷き」を確認し、意図的に貼り付けられている状況であった。バラス敷きは小石、陶器片、青灰色砂質土の混合土層を呈し、全体はかなり硬

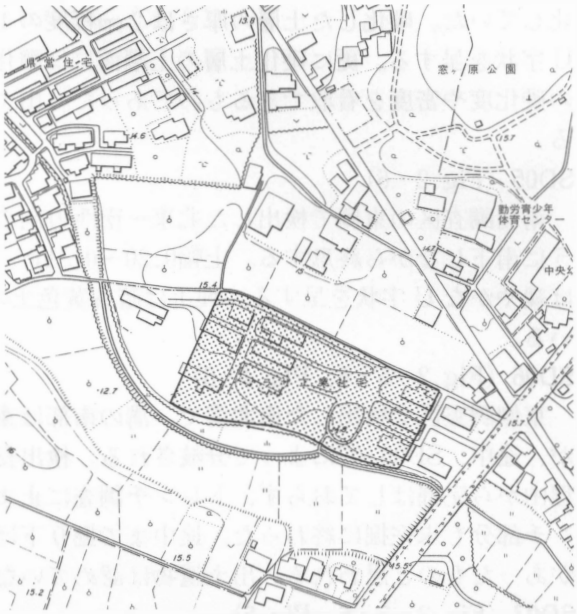


Fig.3 久富綿打遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

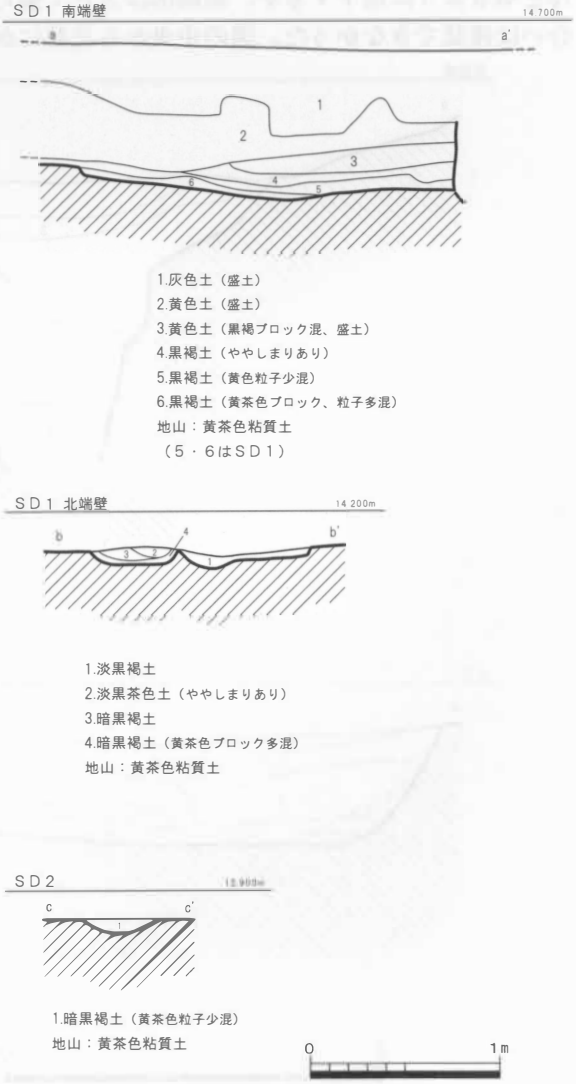


Fig.4 SD01・02土層断面実測図 (1/40)

化していた。硬化した土層の厚さは２㎝程度の１枚からなっており、断面は中央部がやや窪んだ緩やかなＵ字状を呈する。更に硬化土層の上端面には酸化鉄と思われる茶褐色層が薄く堆積しており、バラス敷きの硬化度や密度を看取できるものであった。出土遺物は硬化土層に含まれていた陶器(片)が確認されている。

SD05（Fig.2・6）

南側調査区の東側で検出した北東―南西方向の溝である。溝の北端はSD06から分岐し、SD10を切るように南下しながら終息する。上幅0.20～0.31ｍ、下幅0.14～0.21ｍ、深さ0.02～0.11ｍを測り、溝の断面は緩やかなＵ字状を呈する。埋土は暗茶黄色土の単一層で、出土遺物は土師器（小皿・片）が確認されている。

SD06（Fig.2・5・6、Pla.4・6）

東側調査区で検出した南北溝で、溝の南部は東向きへ緩やかにカーブする。SD06は、SD08～16を切るが、途中、SD05･07によって分岐される。検出長は約14ｍで、幅2.57～3.32ｍを測る。時間的な制約等の理由から完掘はしておらず、トレンチ調査に止まった。また、溝底から多量の湧水を認めたことからトレンチ部分も未完掘に終わった。途中まで掘り下げた箇所の土層断面からは少なくとも２回以上の掘り直しがあったものと思われる。出土遺物は認めていない。

SD07（Fig.2・5・6、Pla.5）

南側調査区の東側で検出した北東―南西方向の溝である。溝の北端はSD06から分岐し、途中SD08～12を切るように南下するが、南端部は大きく膨らむ。南端部は別遺構の可能性があるが、検出時での切り合いは確認できなかった。溝の中央から北部にかけては上幅0.45ｍ前後、下幅0.15ｍ前後、深さ0.60ｍ前

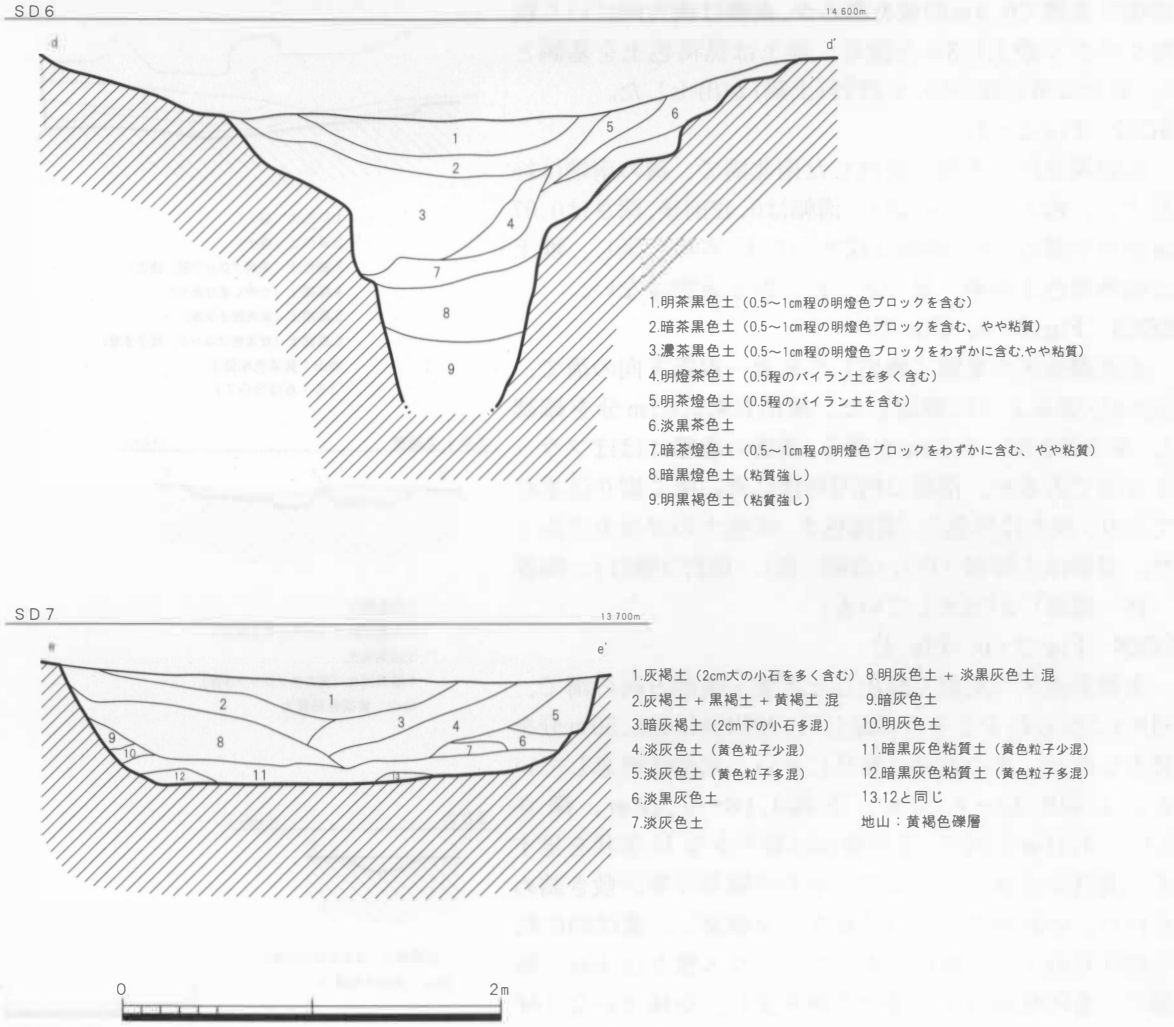


Fig.5　SD06・07土層断面実測図（1/40）

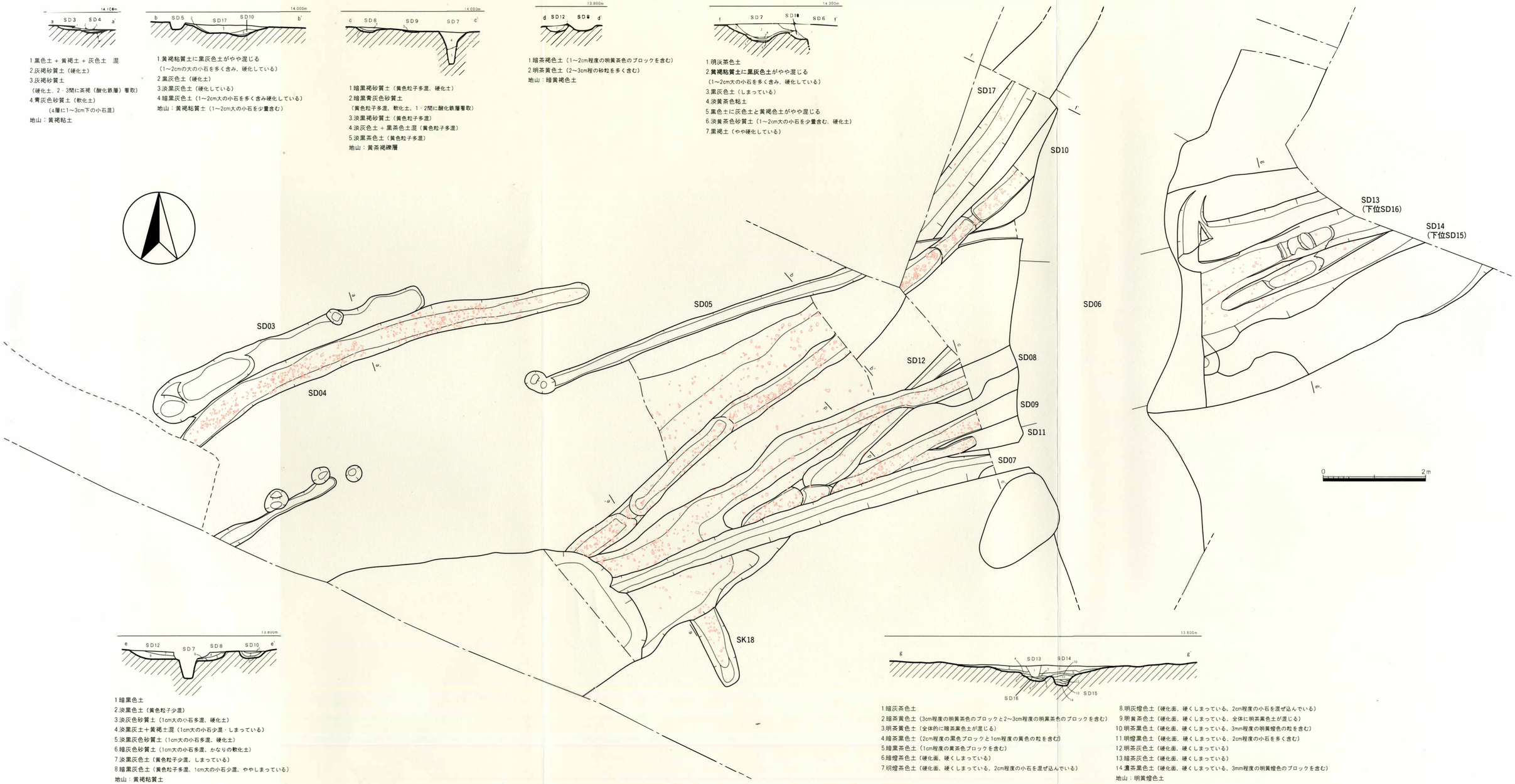
1.黒色土＋黄褐土＋灰色土　混
2.灰褐砂質土（硬化土）
3.灰褐砂質土
（硬化土、2・3間に茶褐（酸化鉄層）着取）
4.青灰色砂質土（軟化土）
（4層に1～3cm下の小石混）
地山：黄褐粘土

1.黄褐粘質土に黒灰色土がやや混じる
（1～2cmの大の小石を多く含み、硬化している）
2.黒灰色土（硬化土）
3.淡黒灰色土（硬化している）
4.暗黒灰色土（1～2cm大の小石を多く含み硬化している）
地山：黄褐粘質土（1～2cm大の小石を少量含む）

1.暗黒褐砂質土（黄色粒子多混、硬化土）
2.暗黒青灰色砂質土
（黄色粒子多混、軟化土、1・2間に酸化鉄層着取）
3.淡黒褐砂質土（黄色粒子多混）
4.淡灰色土＋黒茶色土混（黄色粒子多混）
5.淡黒茶色土（黄色粒子多混）
地山：黄茶褐礫層

1.暗茶褐色土（1～2cm程度の明黄茶色のブロックを含む）
2.明茶黄色土（2～3cm程の砂粒を多く含む）
地山：暗黄褐色土

1.明灰茶色土
2.黄褐粘質土に黒灰色土がやや混じる
（1～2cm大の小石を多く含み、硬化している）
3.黒灰色土（しまっている）
4.淡黄茶色粘土
5.黒色土に灰色土と黄褐色土がやや混じる
6.淡黄茶色砂質土（1～2cm大の小石を少量含む、硬化土）
7.黒褐土（やや硬化している）



1.暗黒色土
2.淡黒色土（黄色粒子少混）
3.淡灰色砂質土（1cm大の小石多混、硬化土）
4.淡黒灰土＋黄褐土混（1cm大の小石少混・しまっている）
5.淡黒灰色砂質土（1cm大の小石多混、硬化土）
6.暗灰色砂質土（1cm大の小石多混、かなりの軟化土）
7.淡黒灰色土（黄色粒子少混、しまっている）
8.暗黒灰色土（黄色粒子多混、1cm大の小石少混、ややしまっている）
地山：黄褐粘質土

1.暗灰茶色土
2.暗茶黄色土（3cm程度の明黄茶色のブロックと2～3cm程度の明黒茶色のブロックを含む）
3.明茶黄色土（全体的に暗茶黒色土が混じる）
4.暗茶黒色土（2cm程度の黒色ブロックと1cm程度の黄色の粒を含む）
5.暗黒茶色土（1cm程度の黄茶色ブロックを含む）
6.暗燈茶色土（硬化面、硬くしまっている）
7.明燈茶色土（硬化面、硬くしまっている、2cm程度の小石を混ぜ込んでいる）
8.明灰燈色土（硬化面、硬くしまっている、2cm程度の小石を混ぜ込んでいる）
9.明黄茶色土（硬化面、硬くしまっている、全体に明茶黒色土が混じる）
10.明茶黒色土（硬化面、硬くしまっている、3mm程度の明黄燈色の粒を含む）
11.明燈黒色土（硬化面、硬くしまっている、2cm程度の小石を多く含む）
12.明茶灰色土（硬化面、硬くしまっている）
13.暗茶灰色土（硬化面、硬くしまっている）
14.濃茶黒色土（硬化面、硬くしまっている、3mm程度の明黄燈色のブロックを含む）
地山：明黄燈色土

後を測り、南端部は深さ0.74ｍを測る。溝の断面は逆台形状を呈し、遺物は土師器(片)が出土した。

SD08（Fig.2・6、Pla.5）

南側調査区の東側で検出した北東―南西方向の溝である。溝はSD12を切るように検出されたが、北端部はSD06、南端部はSD07に切られるように確認された。なお、北端部の延長部では同等の溝（SD16）を検出しており、同一の溝である可能性がある。溝は検出長約９ｍ、上幅0.68～0.41ｍ、下幅0.14～0.43ｍ、深さ0.11～0.23ｍを測る。溝底からはSD04と同じく、１～５㎝位の小石が敷き詰められたバラス敷きを確認した。バラス敷きは小石と砂質土の混合土層を呈し、上層の堆積土と下層の混合土の境には酸化鉄と思われる茶褐色層が沈着していた。硬化土層は厚さ４～７㎝程度の１枚で、断面は中央部がやや窪んだ緩やかなＵ字状を呈していた。遺物は土師器（片）、瓦質土器（火鉢）が出土している。

SD09（Fig.2・6）

南側調査区の東側で検出した北東―南西方向の溝である。溝はSD12を切るように検出されたが、北端部はSD06、南端部はSD07に切られるように確認された。なお、北端部の延長部では同等の溝（SD15）を検出しており、同一の溝である可能性がある。溝は検出長約5.9ｍ、上幅0.40ｍ前後、下幅0.30ｍ前後、深さ0.05～0.11ｍを測る。溝底からは１～５㎝位の小石が敷き詰められたバラス敷きが確認された。バラス敷きは小石と砂質土の混合土層を呈し、ほぼ検出面に近いレベルで確認されたので、SD04・08のような酸化鉄と思われる沈着層は確認できなかった。硬化土層は厚さ２㎝程度の１枚で、断面は中央部がやや窪んだ緩やかなＵ字状を呈する。出土遺物は皆無であった。

SD10（Fig.2・6、Pla.6）

南側調査区の東側で検出した北東―南西方向の溝である。溝の北端部はSD06、北部はSD05、中央部はSD17、南端部はSD07に切られ、検出長は約13.45ｍを確認した。上幅0.40ｍ前後、下幅0.25ｍ前後、深さ0.11～0.26ｍを測り、溝底は若干の凹凸を認める。溝底からは１～13㎝位の小石が敷き詰められた厚さ２㎝程度の１枚のバラス敷きを確認した。上層の堆積土と下層の硬化土の境には酸化鉄と思われる沈着物が看取され、硬化土は中央部がやや窪んだ緩やかなＵ字状を呈していた。遺物は備前系須恵器（擂鉢）が１点出土した。

SD11（Fig.2・6）

南側調査区の東側で検出した北東―南西方向の溝である。溝はSD07・09に切られるように確認され、検出長は僅かに1.75ｍ分を確認したのみである。深さ0.03ｍ前後と非常に浅く、溝底からは２㎝程度の小石が多数確認された。著しく削平を受けていたため、硬化層は僅かしか残っておらず、沈着層（酸化鉄）も確認できなかった。出土遺物は皆無であった。

SD12（Fig.2・6）

南側調査区の東側で検出した北東―南西方向の溝で、SD07～09に切られる。検出長は約8.05ｍ分を確認し、溝幅は南に向かって次第に広がっていく。深さは0.09～0.16ｍで、溝底からは２㎝程度の小石を僅かに認めたものの硬化層は確認できず、沈着層（酸化鉄）も看取されなかった。遺物は土師器（坏・片）が出土している。

SD13（Fig.2・6、Pla.7）

東側調査区の南側で検出した溝である。黒色土を基調とする埋土でSD14を切るように確認された。遺物は土師器（片）が僅かに確認されたのみである。

SD14（Fig.2・6、Pla.7）

東側調査区の南側で検出した溝で、SD06・14に切られる。溝幅3.10ｍ前後を測り、掘削途中、溝状に延びる小石混じりの硬化面を確認した（下位から検出された遺構についてはSD15・16を与えた）。遺物は土師器（片）が僅かに出土している。

SD15（Fig.2・6、Pla.7）

SD14下位から検出した北東―南西方向の溝で、約3.6ｍ分を検出した。溝の南西部はSD06によって切られているが、その先で検出されたSD09に繋がるものと考えられる。南西端部は終息しており、溝底は一部が深く掘り下げられている。溝幅は0.40ｍ前後、深さは最大0.16ｍを測る。堆積土はバラス敷きの様相は

なく、２～３㎝程度の小石が微量含まれるのみであるが、全体はかなり硬く締まっている状態である。また、上層堆積土（SD14）との境には酸化鉄と思われる沈着物が看取された。出土遺物は皆無であった。

SD16（Fig.2・6、Pla.7）

SD14下位から検出した北東―南西方向の溝で、約3.4ｍ分を検出した。溝の南西部はSD06によって切られているが、その先で検出されたSD08に繋がるものと考えられる。溝幅は0.39～0.51ｍ、深さは最大0.22ｍを測り、溝底の中央部は凹凸状を呈する。堆積土はバラス敷きの様相はなく、２～３㎝程度の小石が微量含まれるのみであるが、全体はかなりの硬く締まった状態であった。また、上層堆積土（SD14）との境には酸化鉄と思われる沈着物が看取された。出土遺物は皆無であった。

SD17（Fig.2・6）

南側調査区の東側で検出した北東―南西方向の溝である。SD10を切るように検出長約10.10ｍを確認した。深さは0.15～0.36ｍを測り、溝底は若干の凹凸を認める。溝底からは１～５㎝位の小石が敷き詰められた厚さ４㎝程度を測る１枚のバラス敷きを確認した。上層の堆積土と下層の硬化土の境には酸化鉄と思われる沈着物が看取され、硬化面はほぼ平坦面を呈する。遺物は皆無であった。

土壙

SK18（Fig.2・6）

南側調査区の東端で検出した土壙である。SD07に切られるが、SD12を切るように確認された。平面プランは溝状に細長く、幅は0.55ｍ、深さ0.15ｍを測る。底部からは２～３㎝程度の小石が少量認められたが、硬化面は確認されなかった。出土遺物はない。

（3）出土遺物

SD01（Fig.7、Pla.9）

須恵器

坏（1）　底部の細片で、高台高0.7㎝を測る。内外面はナデ、高台内はヘラ切りの後ナデの調整を施す。胎土は１～２㎜程度の砂粒を含み、焼成は良好である。

土師器

土鍋（2）　口縁部の細片で、玉縁状を呈する。内面は斜め方向の刷毛目、外面はナデの調整を施し、口縁部下位から体部にかけては煤が厚く付着している。

SD03（Fig.7、Pla.9）

白磁

皿（3）　底部の破片で、高台径は4.0㎝を測る。乳白色の胎土にやや青みがかった釉を施すが、畳付から高台内にかけては無釉である。更に、見込みは蛇の目状に釉を掻き取っている。分類はIII類（註１）と思われる。

染付

猪口（4）　体部の細片で、外面には呉須で人物・草木等の文様を描き、透明釉を外面に施す。

陶器

鉢（5）　口縁部の細片で、口縁外部に逆台形状の貼付突帯を施す。口縁端部は無釉であるが、一部に重ね焼きに生じたと思われる目跡が残る。体部外面の器胎に白化粧土を塗り、内外面に飴色釉を施す。口径22.8㎝を復原する。

擂鉢（6）　底部の細片である。高台径14.2㎝を復原し、内面には11本以上の擂目を施す。全面に鉄釉を施し、見込み及び畳付けには砂粒が付着している。編年はＶ期（註２）と思われる。

SD04（Fig.7、Pla.9）

陶器

不明（7・8）　共に碗の口縁部と思われるが、細片であるため器種は不明とした。共に内外面一部の器胎に白化粧土を塗り、施釉している。

SD05（Fig.7）

土師器

小皿（9・10）　9は口縁部の細片で、口径7.0cmを復原する。内外面の調整はヨコナデである。10は底部の細片で、磨耗のため調整は不明であるが、外底は糸切りによる切離しと思われる。

SD08（Fig.7、Pla.9）

瓦質土器

火鉢（11）　口縁部の細片で、口径14.0cmを復原する。口縁部は内湾し、外面には花文を押印する。分類はＢＩａ類（註３）と思われる。

SD10（Fig.7、Pla.9）

備前窯系陶器

火鉢（12）　口縁部の細片で、口径30.2cmを復原する。内面には口縁部付近まで擂目が施されるが、擂目の単位は不明である。口縁部には黄白色の斑点、内外面には赤茶色の緋襷（ヒダスキ）が看取される。編年はII期（註４）と思われる。

SD12（Fig.7、Pla.9）

須恵器

坏（13）　口縁部の細片で、口径16.0cmを復原する。胎土に黒色粒子を少量含み、焼成は良好である。内外面はヨコナデ調整である。

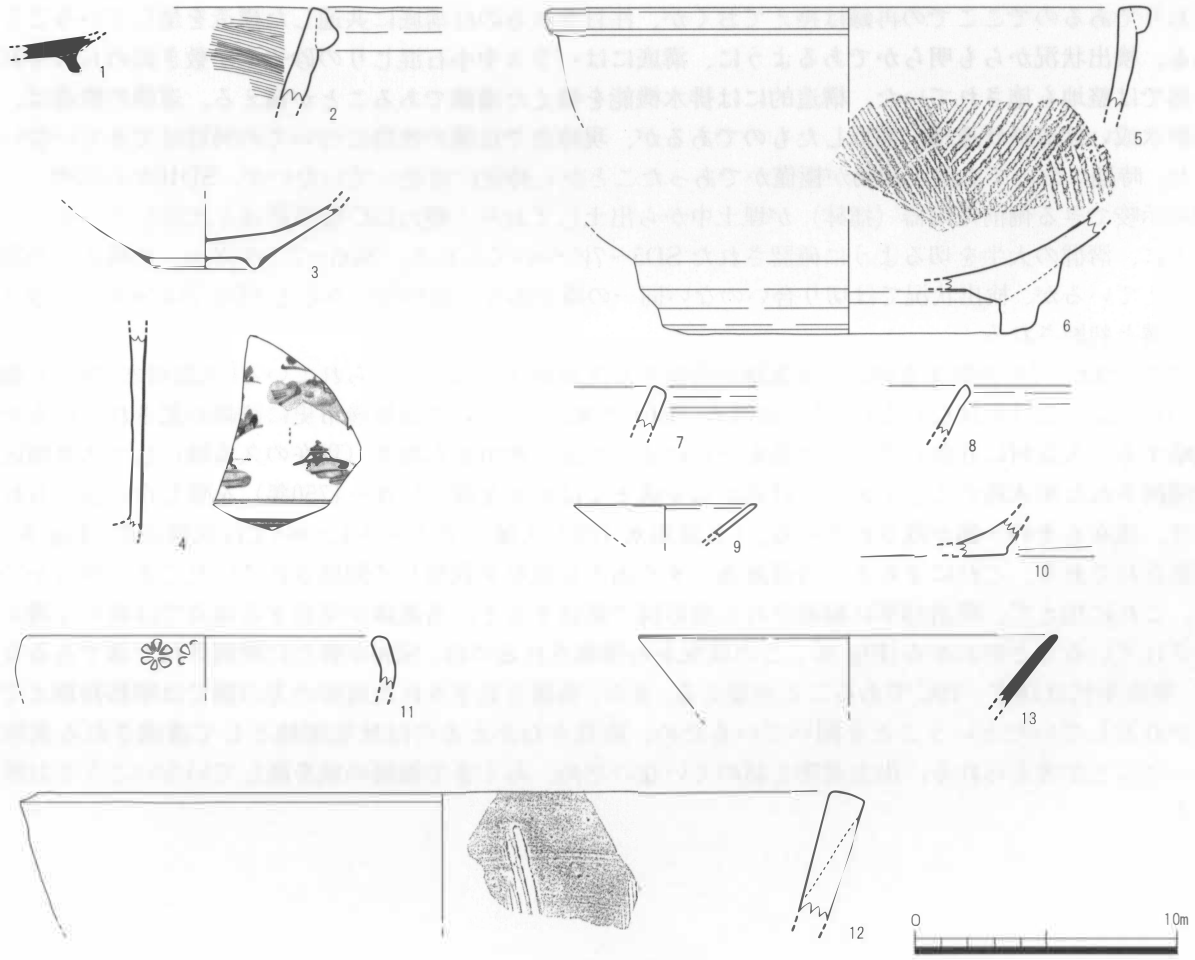


Fig.7　出土土器実測図（1/3）

【註】

・（3）出土遺物の本文中に記載している土器の編年及び分類は、下記の文献を参考とした。

1　太宰府市教委　『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』　太宰府市の文化財第49集　2000

2　九州近世陶磁学会　『九州陶磁の編年』　2000

3　山村信榮　『中近世土器の基礎研究VI』　日本中世土器研究会　1990

4　間壁忠彦　『備前焼』　ニュー・サイエンス社　平成３年

Ⅳ.まとめ

今回、調査した久富綿打遺跡は標高14ｍ位の低位段丘上にあり、地形的には南部が北部よりも約１ｍ位低く、南斜面に位置する。調査地内は数年前まで（株）ラサ工業の社宅が存在していた場所で、調査地内からはその建物跡が多く認められた。このため、遺構は建物跡（撹乱）によって失っていたが、調査区の南東隅からは僅かながら中世～近世の遺構（SD3～17）を確認することができた。

確認された遺構の大半は溝状に検出され、この内SD3・4・8～17は何れも溝底にバラスや小石が敷き詰められた特殊な構造を呈するものであった。調査は、検出時点において一部の硬化土を確認していたことから道路状遺構の可能性も想定され、溝と道路状遺構の二者を念頭において進めた。

まず、溝群（SD3～17）の検出状況から整理する。溝群の先後関係は古い順にSD4→SD3、SD11･12→（SD9･15）→（SD8･16）→（SD5～7）、SD10→SD17→（SD5～7）となる。溝群の大半はSD5～7によって分断されたされており、SD8―SD16、SD9―SD15は同一遺構である可能性が高い。次に、溝群を方位別に整理すると、SD10及びSD12は概ねN―50°―Eの方位を示し、（SD8・16）、（SD9・15）、SD11は概ねN―65°―Eの方位を示す（SD17は蛇行しているため計測不能）。各溝の規模や構造についての詳細は前稿のとおりであるのでここでの再録は控えておくが、注目されるのは溝底に共通した構造を呈していることである。検出状況からも明らかであるように、溝底にはバラスや小石混じりの砂や土が敷き詰められており、一部では整地も施されていた。構造的には排水機能を備えた遺構であることが窺える。遺構の構造は、暗渠排水或いは道路状遺構に類似したものであるが、現時点では溝の性格についての判別はできていない。また、時期においても出土遺物が極僅かであったことから特定には至っていないが、SD10からは唯一、時期を示唆できる備前系陶器（擂鉢）が埋土中から出土しており、概ね13C後半前後を比定している。

次に、溝群の大半を切るように確認されたSD5～7についてふれる。SD5～7は便宜上、遺構番号を別々に与えているが、検出状況では切り合いのない同一の溝であり、地形的にみるとSD5･7はSD6から取水された溝と判断される。

さて、SD5～7を説明する前に、当遺跡が所在する久富地区に言い伝えられている「久富用水（四十八堀）」についてふれなければならない。「久富用水（四十八堀）」については筑後市史に詳細が記されているが、概略すると久富村に在住していた中島安平らによって山ノ井川から取水（現在の久富堰）して久富地区まで開削された用水路のことである。計画から完成までは約30年間（1720～1750年）を要したと伝えられており、現在もその一部が残されている。「久富用水（四十八堀）」のルートについては筑後市史（Fig.8）で復原されており、これによると、当遺跡地のすぐ南の谷地形を利用して開削されていたことが明らかである。これに加えて、明治33年に編纂された地形図で確認すると、当遺跡が所在する地点では新たな溝が付設されていることがわかる（Fig.9）。この状況から推測されるのは、SD6が新たに開削された溝であるならば、築造年代は18中～19Cであることが窺える。また、当溝を見学された近所の方の話では昭和初期までは溝が存在していたということを聞いているため、終焉をむかえるのは社宅用地として造成される直前であったことが考えられる。出土遺物を認めていないため、あくまで推測の域を脱していないことをお断りする。

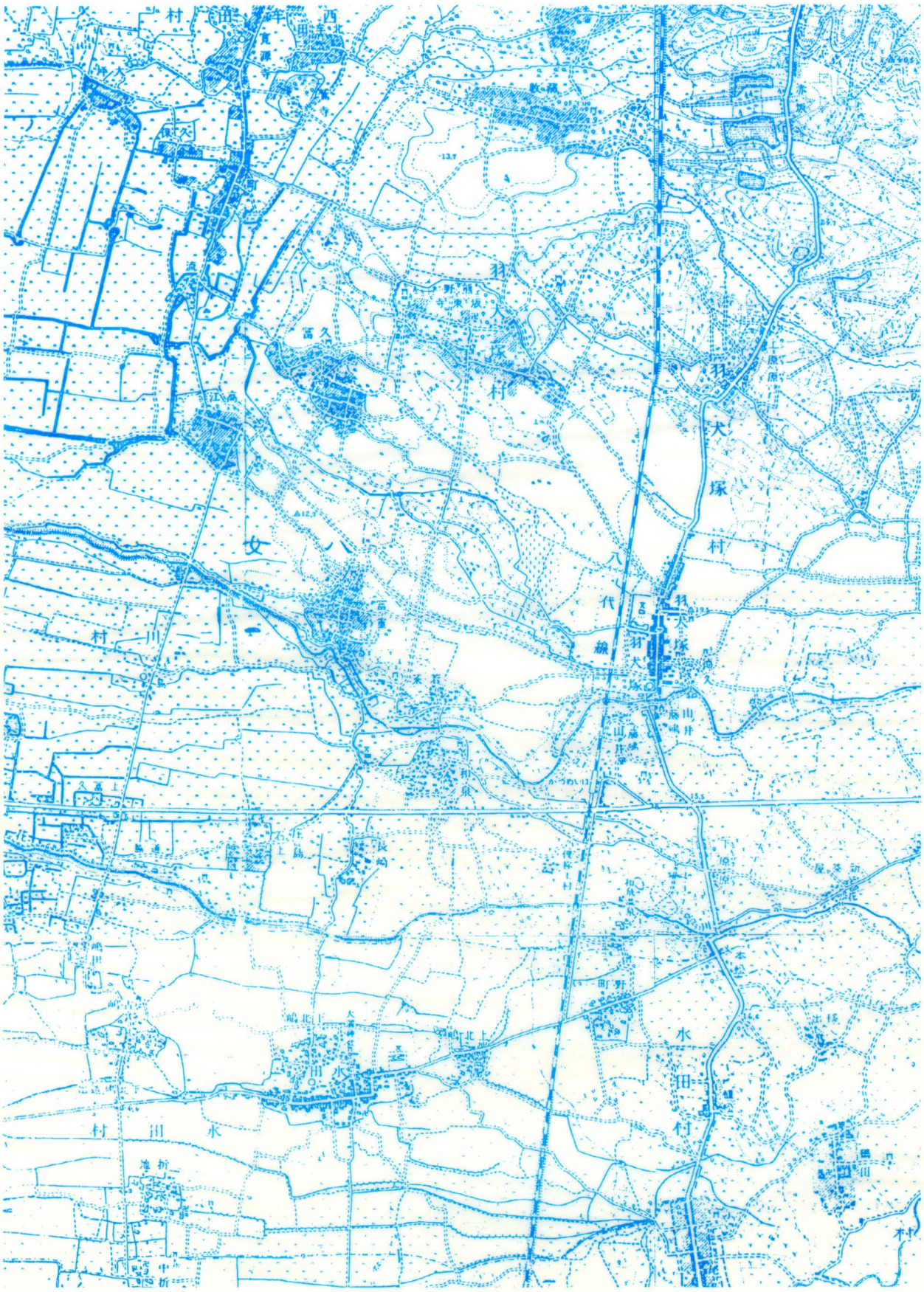


Fig.9　明治35年の久富綿打遺跡周辺地図（1/25,000）

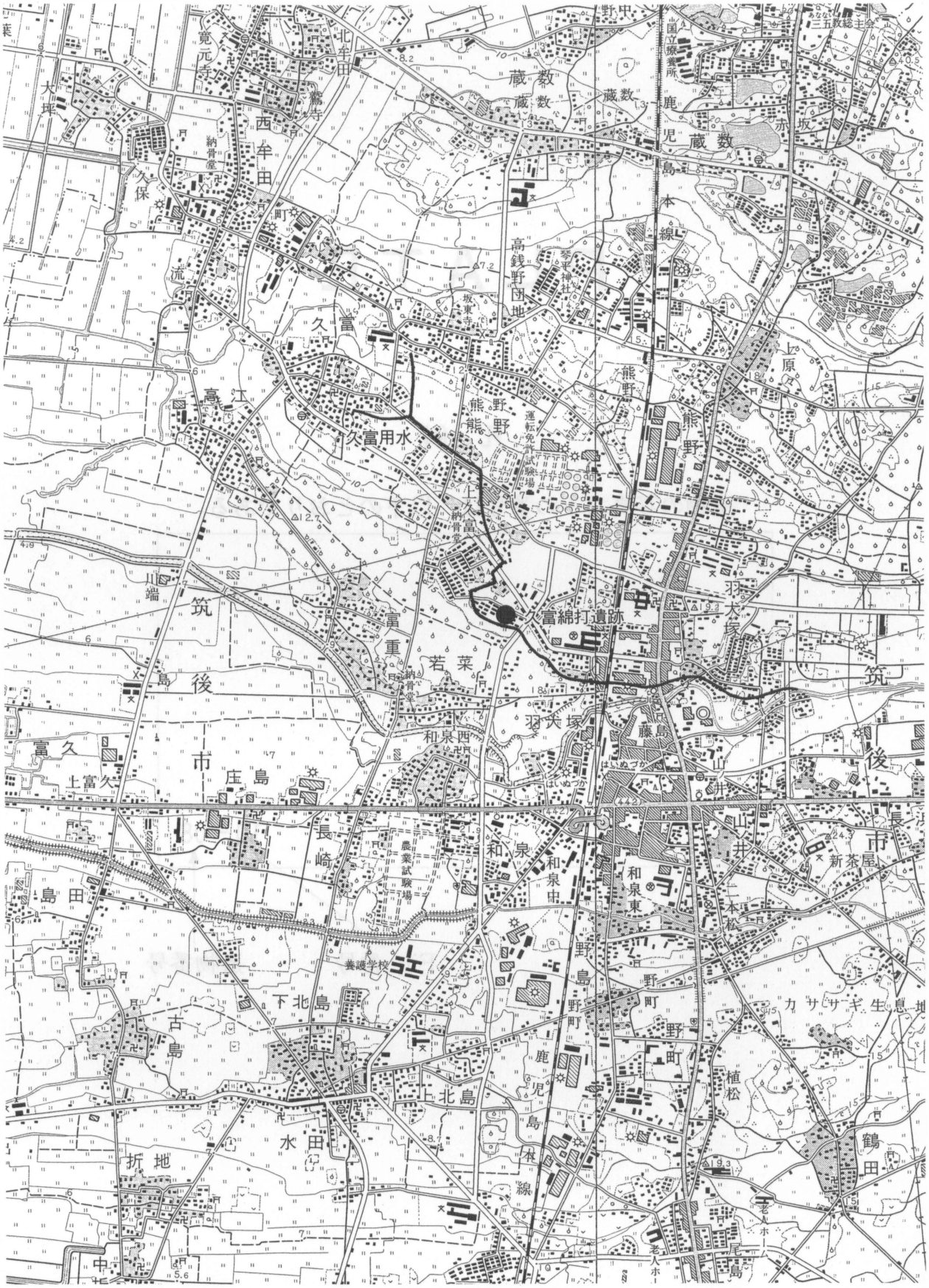
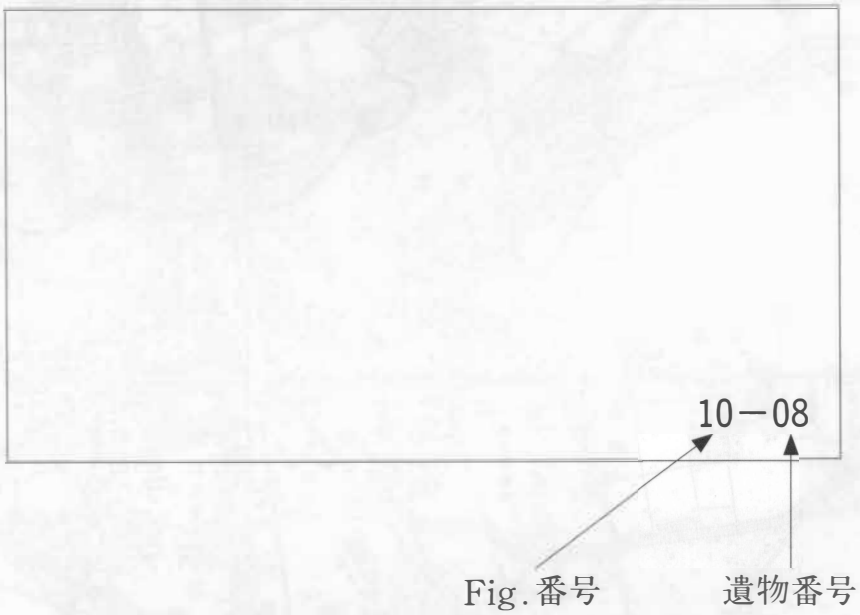


Fig.8　久富用水復原地図（1/25,000）

PLATE

凡　例

遺物の写真右下の番号は、以下のとおりである。



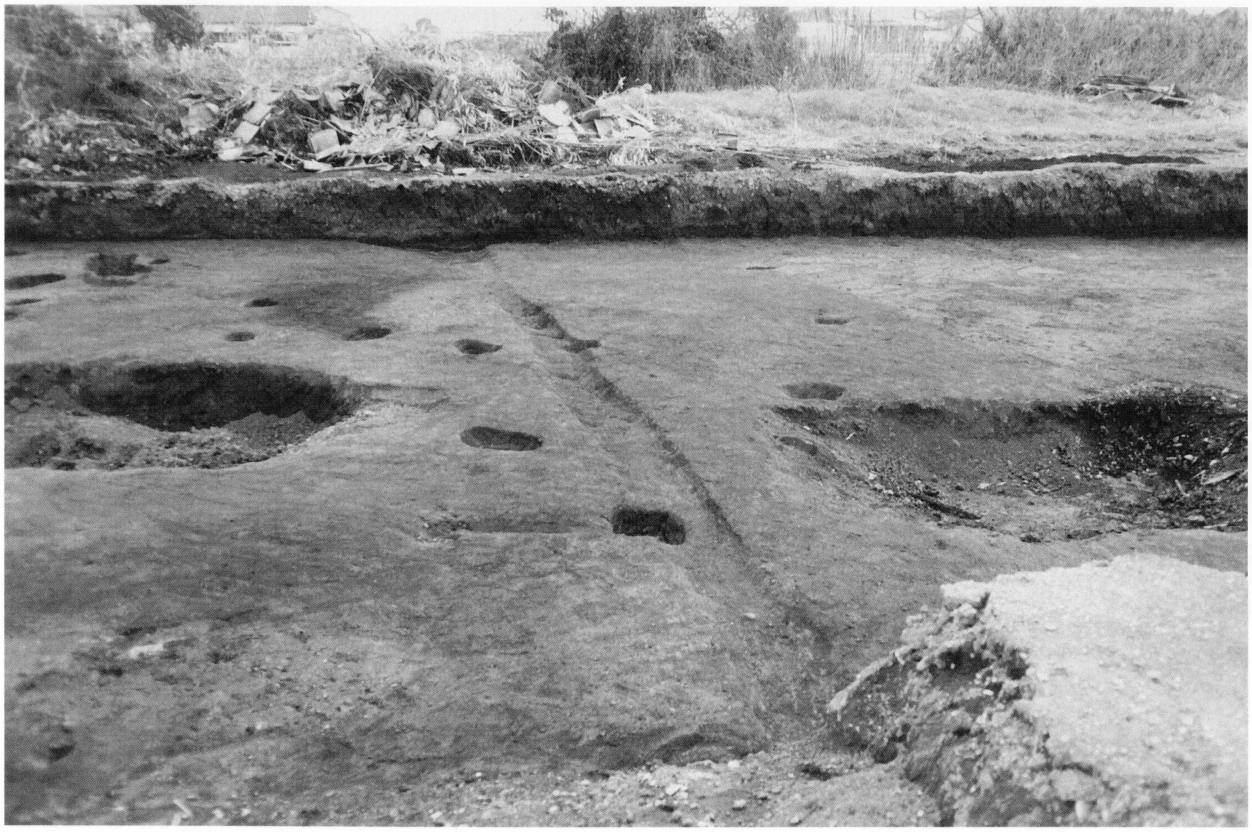
北部調査区遠景（西から）

東部調査区遠景（北から）

東端部調査区遠景（西から）

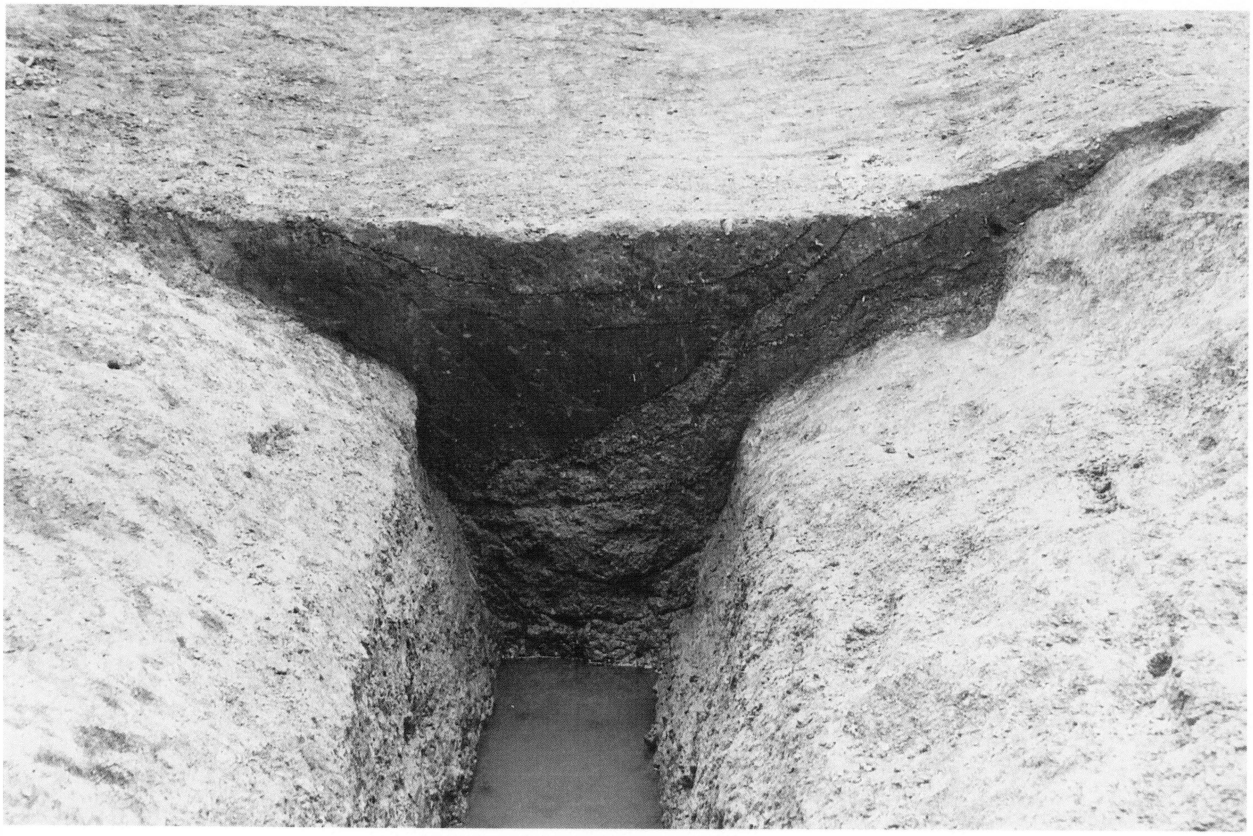
南部調査区遠景（東から）

南東部調査区遠景（南西から）



SD01（北から）

SD03・04土層断面及びバラス検出状況（南から）



SD06土層断面（北から）

SD07土層断面（南西から）

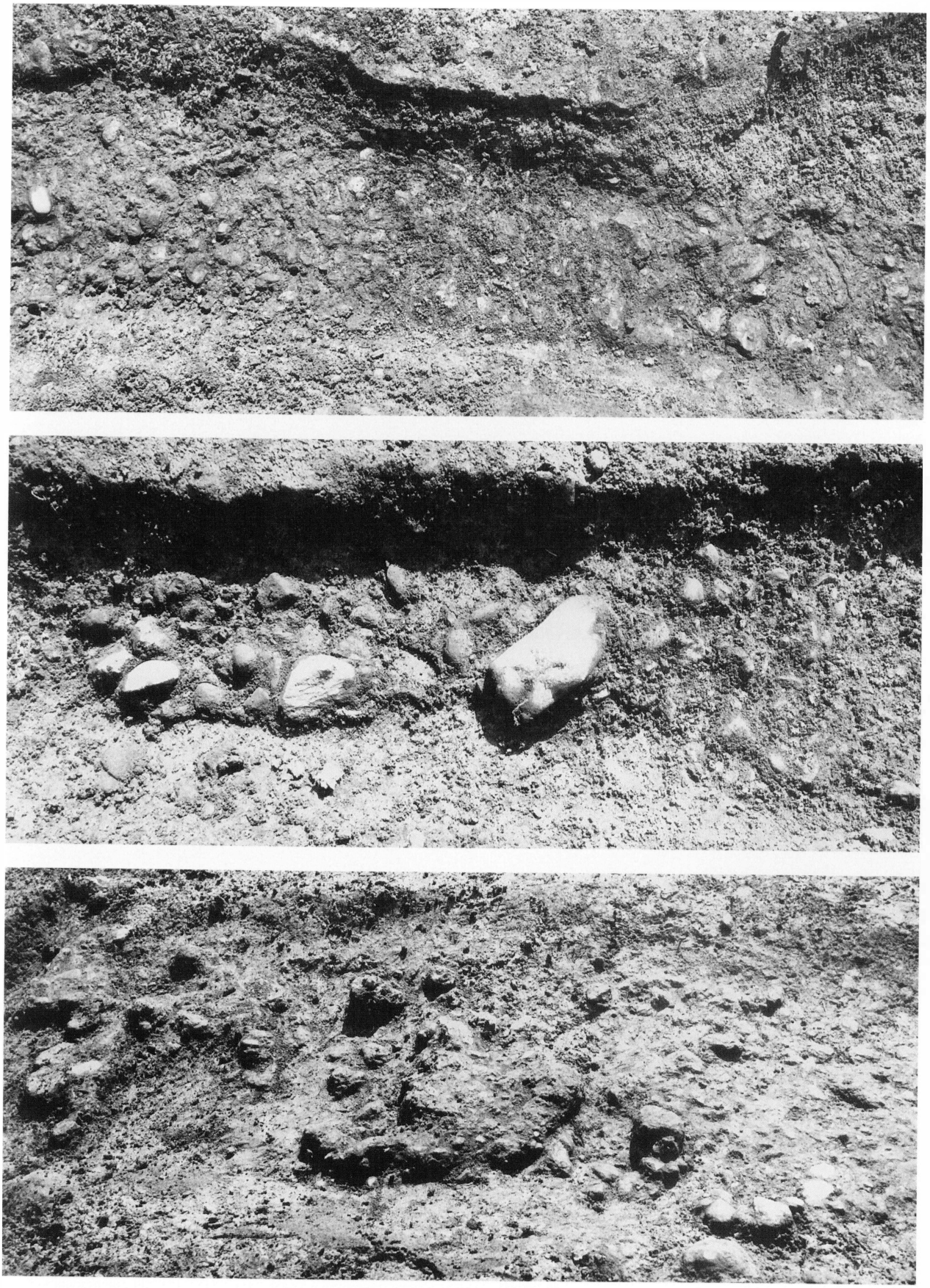
SD08土層断面及びバラス検出状況（南西から）

SD10・17土層断面及びバラス検出状況（南西から）

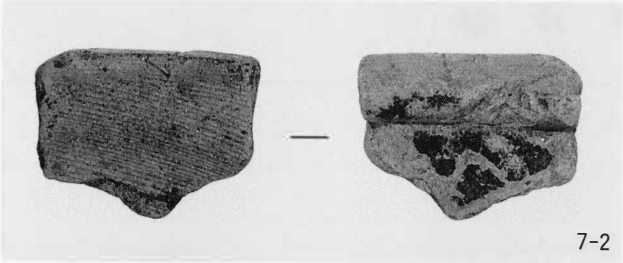
SD06・10・17土層断面（南から）

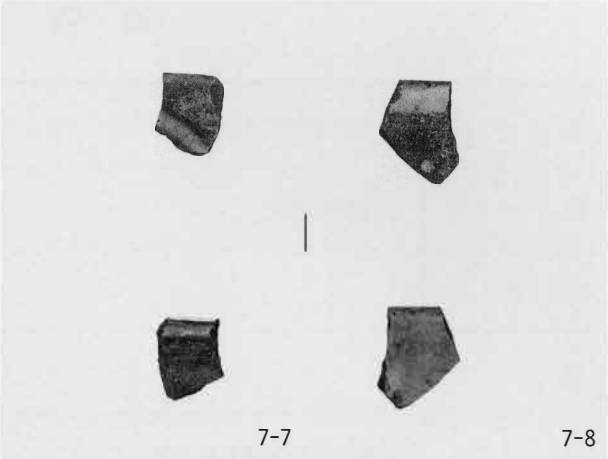
SD13～16土層断面及び硬化面検出状況（南西から）

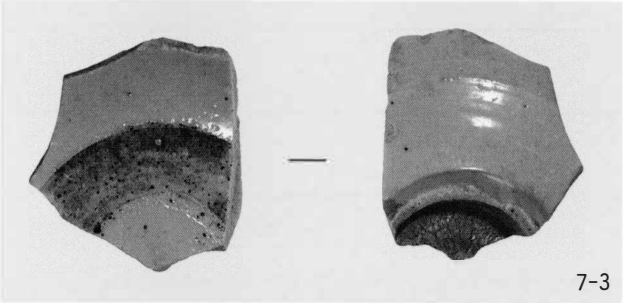
SD14・15土層断面（南西から）

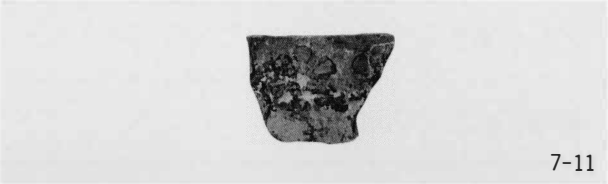


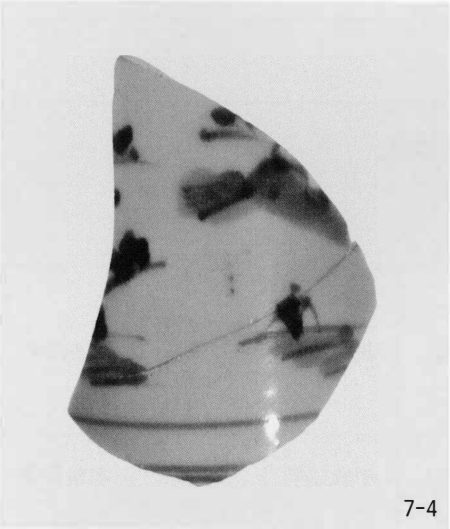
バラス・小礫・硬化土検出状況（斜め上から）

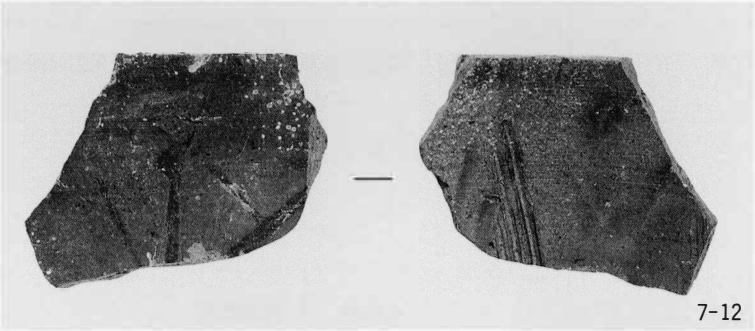

7-2

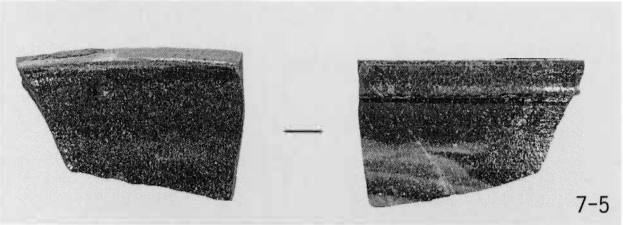

7-7 7-8

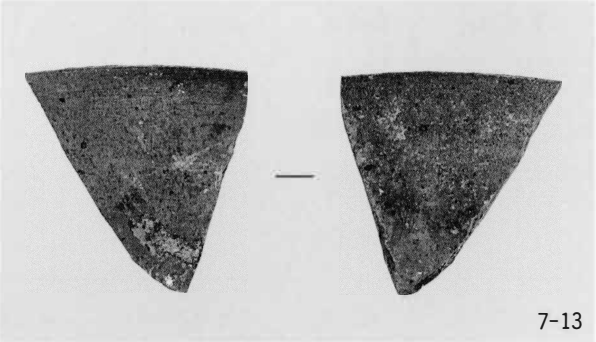

7-3

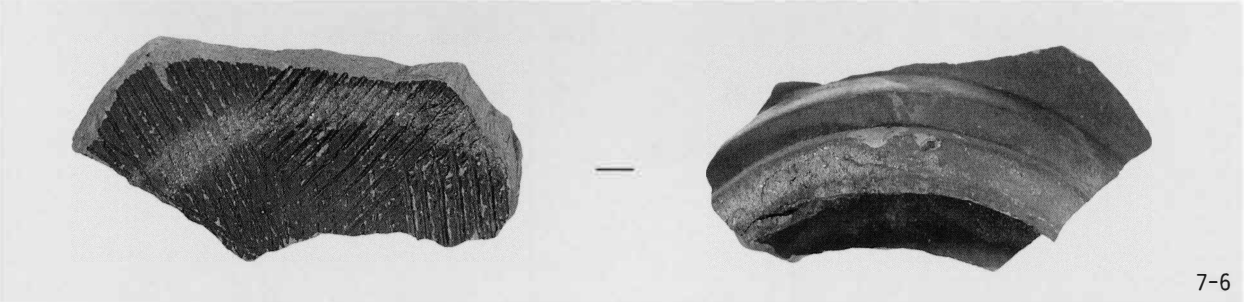

7-11


7-4


7-12


7-5


7-13


7-6

久富綿打遺跡
筑後市文化財調査報告書
第41集
平成14年３月31日
発　行　　筑後市教育委員会
福岡県筑後市大字山ノ井898
印　刷　　九州電算株式会社
佐賀県佐賀市天神一丁目１番32号